

20歳未満の感染増加

全体の1割「まれに」重症化の例も

「子どもは感染しにくい」とされてきた新型コロナウイルスだが、感染者全体に占める20歳未満の割合が約1割にまで高まってきた。感染後、わずかながら重い症状に陥る例も報告されている。感染力が強い変異株の流行を踏まえ、専門家は家庭での対策を改めて徹底するよう訴えている。

各地の学校や保育施設でクラスター（感染者集団）が発生している。

新潟県の保育園では2月、変異株のウイルスによつて園児13人、保育士ら4人が感染。さらに家族にも

広がり、計42人の大規模クラスターになつた。「変異株の感染力の強さを物語る事例だ」と日本小児科学会事例だ」と日本小児科学会で感染症対策を担当する斎藤昭彦・新潟大教授は話す。

厚生労働省の6月2日時点のまとめによると10代以下の感染者は7万8952人。全体（73万7086人）の約10・7%を占める。

変異株が広がつてきた2月3日時点の感染者数からは約2・2倍となつた。一方、20代以上の各年代の伸びは約1・9倍だった。たゞ、その理由ははつきりしていない。斎藤さんは「感染力の強さで患者全体が増える中で、子どもの患者もかうつされたことが多い」とみる。家族が増えた影響を一層受けて

いるともみられている。

子どもの場合、ほとんどが軽症で済むが、極めてまれに、感染から数週間後に重症化する例がある。心機能や肝機能が低下したり、下痢や腹痛など消化器の症状が出たりする「小児多系統炎症性症候群（MIS-C）」で、国内でも複数報告されている。

日本川崎病学会が確認した4例のうち10代の男児は家庭内感染の約2カ月後、

米国では、5月6日までに385万人以上の人児が新型コロナに感染した。米疾病対策センター（CDC）の5月3日までのまとめではMIS-Cの患者が約3700人、うち35人の死亡が報告されている。

日本川崎病学会副会長の鮎沢衛・日本大准教授は「子どもへの感染が広がつて、国内でもMIS-Cの患者が増える可能性がある。感染後1～2カ月間は注意し、異常があれば小児診療の態勢が整う病院で診察を受けてほしい」と話す。

半数が無症状 発熱は25%

日本小児科学会による10代以下の小児の分析では、およそ半数が感染しても無症状で、37・5度以上の発熱も25%にとどまる。健康チェックで発熱だけに注目しても感染が見逃される恐れがあり、自覚症状が薄いままウイルスが広がつてしまふ懸念がある。

2歳未満の子どもには、窒息や熱中症のリスクがあるため、日本小児科医会はマスクを着けないように呼

